
黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

ヴェンデッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

【Nコード】

N3996Y

【作者名】

ヴェンデッタ

【あらすじ】

ワールドシェア一位を誇るVRMMORPG『ブレイブワールドオンライン』。その世界で戦い続ける黒衣のプレイヤーことニルヴァーナはある日1人のメイドと出会う。電子空間の中で戦う2人の物語、ここに開幕です!!

第0話 始まりの日（前書き）

初めまして、ヴェンデッタと言うものです。このたびは書き溜めていたオンラインゲームものの小説を投稿してみることになりました。設定や読み辛いところがあるかもしれませんが、応援の程よろしくお願いいたします。

では第1章開幕です!!

第0話 始まりの日

高校二年生である黒河裕介の学校内での評価は『頼りになるいい人』だった。相談には親身に答えてくれる、何かあった時は的確なアドバイスを送ってくれる、不得手教科はあるものの勉強も教えてくれる、それでいて過度に干渉してこない。まさしく『いい人』の鏡のような人物だった。だがそれは表向きの話、彼の実際の姿を見たらほとんどの人は幻滅する。なぜか？理由は恐ろしく単純明快だ。その理由とは・・・彼が重度のネットゲーマーだったからだ。

なぜ彼がここまで、この世界にハマってしまったのか、その理由は数ヶ月前、彼がオンラインゲームを始めたところまで遡る・・・。

数ヶ月前 帝都『ルスラ・ウィルド』

2016年現在、全世界で5000万人以上がプレイしているVRリアリティRMMO（マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン≫RPG、仮想現実空間で自分がまるでその世界で戦うというネットゲーマー達の夢をかなえた究極のRPGにして、ワールドシェア1位のオンラインゲームがこの『ブレイブワールドオンライン』だ。ファンタジックな世界観に5000種類以上の武器防具、様々な職業にモンスター、そして戦闘以外にも鍛冶や裁縫、釣りや料理、音楽などが多数用意され、ゲーム内で生活することができるというのが好評を博している。

BWOのサービスが始まったときから存在するというレイヴェア大陸にある国家、オルテンシア帝国の首都『始まりの街』こと帝都ルスラ・ウィルドはいつも賑やかだ。初心者はいいていこの街を拠

点にしているので、それに合わせて自然と人も集まってくる。アイテムショップや鍛冶屋も店を広げている。その中でも多くの店が軒を連ねるメインストリートを一人の青年にして、裕介のこの世界の分身でもあるキャラクター・・・ニルヴァーナが歩いていた。彼の職業は大剣士、パーティーの前衛職の中では2番目に人気の職業だ。装備は白いシャツにレザー系の防具を装備している。背中に装備しているのはレベル10から装備できる大剣、バスターブレイズを装備、服装も装備もまだまだ未熟な典型的なBWOルーキーの一人だった。現在のレベルは11、まだまだ新人に毛が生えた程度で、今はミッシヨンの終了報告を終えてきたところだ。

簡単だった割に意外と報酬が多いスカルフラワー討伐は彼にとってもいい稼ぎ口でもある。生産系スキルを上げるつもりはないので武器の素材になるもの以外は街にあるNPCの道具屋に売ってこのゲーム内の通貨であるVに換金する。^{ヴェニート}

「ねえ、あんた、初心者だよね」

再び経験値を稼ぎにフィールドに出ようとした時、後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこに立っているのは男女の二人組、男の方は片手剣使いで、女の方は彼と同じく大剣使いだった。装備から見るにおそらくレベルは20代後半か30代くらいだろうと彼は推測した。

「そうですね……どうかしました？」

「いや、ここからちょっと行ったらここに経験値をガンガン稼げるフィールドがあるのよ。どう、行ってみる？」

女の方が彼に尋ねてきた。レベルは可能な限りあげておきたいので、素直に誘いに乗ることにした。

「じゃあ、お願いします」

「堅い堅い、もっと気楽に行こうよ。私はカルラ。よろしくね」

「俺はレイズだ。よろしくな」

「ニルヴァーナです、よろしく」

こうして三人は街を出た。だが、この判断こそが後に重大な過ちを招くことになるなど当時の彼は予想だにしていなかった。

第0話 始まりの日（後書き）

では感想をお待ちしております!!

第0・5話 初心者狩り（前書き）

第一話が始まってすらいなのに戦闘シーンってどうなのさ・・・？

第0・5話 初心者狩り

帝都からしばらく行つたところにある広大な森林地帯、ここは基本的にレベル20近くのモンスターが多く出現するところである有名な場所、ここをクリアできるようになったとき初めて初心者から半人前になる。

「はあっ！」

バスターブレイズから繰り出された一撃がスライムに直撃する。スライムがポリゴンのかけらとなって消失するのを見届けると、彼のレベルは16になっていた。

「はー、さっき狩り始めたばかりだったのに、もう16なんだ、成長速いね〜」

「そんなことないですよ。これも二人のおかげですって」

そう言つてニルヴァーナが笑う。ここでの戦いはまずカルラとレイズが出てきたモンスターのHPをある程度まで削つたところでニルヴァーナとスイッチしてそのまま彼が止めを差すという戦法をとっていた。街から持ってきていたポーションもさつきから減つていなかった。レベルアップ時のポーションポイントを筋力値と体力値に割り振る。BWOのステータスには、基礎となる6つのステータスと、基礎ステータスというものが存在する。筋力、敏捷、体力、魔力容量、器用、運の6つで、これらを割り振つて自分のキャラクターを構成していくのだ。ニルヴァーナは大剣士型によくあるSTRとVITにポイントを割り振っているがそれ以外のAGIやINT

も強化している。ソロプレイでは大抵のことを一人でこなさないといけないため、ある程度バランスよくステータスを上げている。

「じゃ、あそこがこのフィールドの目的地だよ」

カルラが指さした先にあつたのは古い神殿だった。今は植物の蔓が柱に巻き付いて自然に帰ろうとしている。その神殿の中を3人が歩いていく。この神殿はモンスターが出現しないはずなのだが・・・後ろの二人が剣を抜いた。そしてカルラが手に持っていた大剣をニルヴァーナへと振り下ろす。間一髪でそれについた彼は二人の方に向き直る。

「何の真似ですか、これは」

二人はニヤニヤしたまま何も答えない。だが、その笑顔には確かな悪意が混じっていた。罠に掛かった獲物をバカにするような類の笑いだ。

「まったく、見事に掛かってくれちゃって、ほんつとに笑えるわね！」

「で、カルラ。どうする？この前は俺がやったから今日はお前の番だぜ」

「OK、じゃ、今日は遠慮無く狩らせてもらうわよ。これだから初心者狩りは止められないのよね」

再び大剣を構えてカルラが突進してくる。ニルヴァーナも剣を構えた、PCに向けるのは初めてだが、迷っている暇はない、剣を抜

いて戦わないと自分がやられてしまう。

「ふーん、やる気なんだ」

カルラが大剣を振るう、剣の性能とそれを使うカルラの能力によって剣は絶大な威力を持って彼に迫る。一撃目は回避、二撃目はバスターブレイズで防ぐ。大剣同士が弾きあって盛大に火花が散った。大きくのけぞったカルラにバスターブレイズの一撃を叩き込む。大きくカルラが吹き飛ばされたがHPはほとんど削れていなかった。相手は30代、対するこっちは16なのだからまともにやり合って勝てるはずがない。

「よくもやってくれたね……」

忌々しそうにカルラがいう。レイズが手に片手剣を持った。どうやら静観する気がなくなったらしい。

「適当に痛めつけるだけにしようと思ってたけど気が変わった。こいつは徹底的に捌り殺す……」

「俺も手伝うぜ」

二対一というあまり喜べない状況になってしまった。カルラが大剣で斬りかかってくると同時に時間差でレイズも片手剣で斬りかかる。カルラの攻撃を何とかやり過ごした後でレイズの片手剣を弾く。レイズが片手剣スキル《風牙》を繰り出した。バスターブレイズのガードが間に合わない、まともに食らって神殿の床に叩き付けられる。起き上がろうとしたところでカルラの大剣が迫る。起き上がった姿勢でカルラの斬撃をガード、右足でカルラを蹴飛ばして彼女の体勢を崩す。立ち上がって後ろに距離を取る。サイドポーチからポ

ーションの入った瓶を取り出してそれを飲み干した。黄色になっていたHPバーが緑へと戻る。

「そらそらそらあつつー！」

レイズが連撃でソードスキルを放つ、そしてカルラが前に出てきた。大剣のソードスキルのレーションに入るよりも速くニルヴァーナが大剣スキルのひとつ《スラスト》を放った。発動中のカルラがそれに気付くが既にもう遅い、バスターブレイズの一撃がカルラのHPバーを削った。

「カルラ！」

レイズが相棒であるカルラに声を掛けたその隙を見計らって彼は逃走した。神殿さえ出れば、後はモンスターを避けつつ街に帰ればいい。そう思った直後、一気に距離を詰めたレイズがソードスキル《ガルウェータ》を繰り出した。衝撃波が地面を伝ってニルヴァーナに命中する。大剣を仕舞っていたのでガードすることすらままならずHPを大きく削られた。

「倒したと思ってるのかよ」

レイズの嘲笑、再びバスターブレイズを抜いてレイズと斬り合う。だが相手は片手剣、手数が多さから見れば相手の方が多い。次第にHPを削られ、いよいよレッドゾーンへと突入した。ともに回復する間なんてない。そして・・・復活したカルラとレイズが同時にスキルを発動させた。レイズのスキルが彼の持っていたバスターブレイズを砕く、連戦で武器耐久度が限界に達したのだ。そしてポリゴンの欠片となって消えた武器を気にするまもなくカルラが迫る。そこで、彼のHPは0になった。フィールドの中でHPが0になっ

たときは最後にセーブした街の前に戻される、いわゆる死に戻りというやつだ。こうして彼は一つ学んだ。この世界には悪意を持ったプレイヤーもいるということを。

ルスラ・ウィルド 13:22

このBWOでは天候が固定されているフィールド以外は常に天気が変わる。今のルスラ・ウィルドは曇っていた。『死に戻り』をして、ルスラ・ウィルドの城壁の前に立つ、背中には武器は背負っていない。そのまま門をくぐり、メインストリートを歩いているといつの間にか雨が降り始めた。雨の中を歩いていくニルヴァーナ。彼にとつて幸運だったのはある程度の蓄えがあつたことだった、もちろんあの神殿でドロップしたアイテムもあるが、レア度があまり高くなかつたため、それほど被害は酷くはなかつた。いつの間にか彼はメインストリートからプレイヤーメイドの店が軒を連ねる通りに入っていた。この地区では鍛冶スキルを上げたプレイヤー達が様々な武具を製造している。

今の彼の中にあるのはただひたすらにレベルを上げることだった。何よりレベルが足りなければ自分の身をまともに守ることすら出来ない。今回の一件で彼はそれを痛感したのだ。

(ま、とりあえず武器だな……)

雨が降っている通りを歩いていると、気になる店を見つけた。店の名前は『ヴォルテンの武器工房』ニルヴァーナ自身も何度か酒場で話していたプレイヤー達の噂で聞いたことがある名前だった。

その店が専門に製造しているのは複合武器・・・いくつかの武器を合体させて作り上げた武器を専門に売っている店で、店の前に張

つてあるチラシには閉店セールと大きく書かれていた。どうやら店を移すために残っていた武器や鎧の安売りをしているらしい。店の中に陳列されている商品は基本的な武器以外全てが売れ残っていた。どうやらこの街ではあまり複合武器の需要はないらしい。

そんな中に彼の気を引く武器があった。一見すると大剣のように見えるが、実際は柄が5つに分離して鎖鎌のような形態に変形するという複合武器だった。どうやら噂は本当のようだった。値段は・
・今持っている素材アイテムを全て売却して貯金していたVと合わせれば買える値段だった。

「すみません、あの剣買いたいんですけど……」

店主にVを渡す、彼はこうして新たな剣を手にした、その新たな剣の名前は・・・『フォービドゥン』。

第0・5話 初心者狩り（後書き）

戦闘描写に関する指摘や感想お待ちしております。それでは。

第1話 金を取り戻せ（前編）（前書き）

感想こないなあ・・・

第1話 金を取り戻せ（前編）

初めてのPKから一ヶ月後、ニルヴァーナのレベルは35になっていた。毎日狂ったように経験値を稼ぎ、信じられない速度でレベルアップしていった。最近はいつも振っている愛用の大剣も重く感じなくなった、だが背負っている大剣・・・フォービドゥンは刃こぼれが目立ち始めている。このところ大型モンスターとの戦闘を重ねたためガタが来つつあるのだ。武器の耐久値も危険な領域に差し掛かっている証拠だ。

（でもなあ……）

この剣は複合武器である特性上早々メンテナンスに出せない。出せない最大の理由は、武器には専用の整備スキルというのが存在する、例えば片手剣なら片手剣整備のスキルを持っていれば自由に修復できるのだ。だが、このスキルを取得するためには多くの武器を見たり、鑑定しないと取得できないので、基本的には鍛冶屋に一任されてしまう。だが、三日前から彼が拠点としている街、魔術都市ダンテローザには複合武器整備のスキルを持つ鍛冶屋がないのだ。これでは修理しようにも修理が出来ない。このままだと耐久値がゼロになってしまう可能性だってゼロとはいえない。レベルアップしなければならぬときに武器の限界が迫りつつある・・・これは痛かった。

（真剣にどうしたものか……）

そんなことを考えつつ中央の噴水広場で屋台で買ったホットドックを食べながらニユースウインドウを開いてBWOワールドニユ

スの記事を読んでいると、彼のそばに栗色のツインテール少女がやってきてプラカードを出した。プラカードには大きな文字でこう書かれていた。

『店の資金を奪われました。 お願いです、お金を取り戻すのを手伝ってください』

そのプラカードを見て数人のプレイヤーが笑っている。どうやら彼がここに来る前からこうしてここに立っているらしい。服装は女の子らしい服の上にポケットがたくさんついたエプロンを着ている。ポケットには梶氏がよく使うハンマーや砥石などの道具が入っていた。ダメ元で声を掛けてみる。

「なあ、あんた見たところ鍛冶屋だから聞くけど……複合武器整備のスキル持っていたりしないか？」

「え？複合武器整備……ですか？一応所得してますけど……それがどうかしました？」

「俺の使ってる武器の整備をしてくれるっていうのなら……その依頼受けてやらんこともない」

「え、ホントですか！？ありがとうございます！！！」

どんな反応をするか確かめるために声をかけたはずだったが、少女があまりにも嬉しそうにいうのでいつの間にか断れない空気になってしまった。仕方なく話を聞いてみることにする。

栗色ツインテール少女の名前はシーナ、つい最近まで路上で武器整備や自作武器の販売を重ねてようやく店を持てるだけの資金が貯まったのだが、それを三日前フィールドで素材の採掘をして帰る途

中でこのダンテローザの町周辺を狩り場に行っている『ドレッド』と呼ばれるPK集団に根こそぎ奪われてしまったのだ。

「……で、今まであそこに立ってたってわけか」

噴水の近くにあつたベンチに座りながら彼はシーナの話聞き終えた。

「はい、せっかく念願の店が持てるって思ってたのに……」

再び泣き出しそうになるシーナを宥める。

「ああ、分かった分かった。手伝うから泣かないで」

泣く直前で何とか押しとどめてから行動を開始する。ドレッドと呼ばれるグループはおそらく全員がレベル20後半か30程だろう。さすがに一人で相手にするのはしんどいので助けを借りることにする。二人が歩いてダンテローザの街から少し出たところにある小さな小屋へと向かった、台風でも来ればすぐにでも吹き飛んでしまうのではないかと思うほどボロボロの小屋だった。

「ここに誰かいるんですか？」

「最近一緒に狩りに行ってる俺の知り合いがここで住んでるはずなんだが……おい、椿、いるんだろ。居留守を使うなよ……」

しばらく呼びかけていると小屋の扉が開いた。そこに立っていたのは鼻の上に大きな切り傷のある長身の男だった。髪はバンダナらしき布で後ろにまとめてある。黒地に炎を模したデザインの着物をだらしなく着た落ちぶれた侍のような風体の男で少し長めの刀腰に

差している。

「何の用だニル」

「ようやく出てきたな……久しぶりにPK狩りに行こうぜ」

「……オーライ、話を聞かせてくれ」

ニルヴァーナ『PK狩り』の一言で椿と呼ばれた男がけだるげな表情から一転、好戦的な表情に切り替わる。エンジンがかかってきたところで簡単な事のあらましをシーナから話してもらった。

「OKOK、話は大体解った。つまるところその……ドレッドだっけ。そいつらから奪われた店の購入資金を取り返しゃいいんだな？」

「は、はい、そうです」

若干びくびくしているシーナが椿にそう答える。

「ま、そんなところだ。どうする？」

「やるに決まってるだろ。じゃ、準備してくるわ」

そう言っただけで奥の方に入っていく椿。ニルヴァーナとシーナは先に装備を整えて外で待つことにした。

「あの椿って人……強いんですか？」

どうやら自信がないのかシーナが彼に尋ねた。

「あいつの職業は侍、しかも流行りの二刀流なんだが、武器が独特なんだよ」

「確か……持ってたのは二つとも大刀でしたね」

「よく見てるな、さすがは鍛冶屋」

侍は基本的に刀を使う、そして二刀流侍は基本的に右手に通常の刀、もう片方の手には短い脇差しを持つ。攻撃のパターンとしては脇差しで受け流すなり弾いて、そこから反撃につなげるのだが、椿が使うのは扱いが難しいということで侍でもあまり使わない大刀を使っている、それも両手にだ。

「あいつは俺の知ってる侍の中じゃ最強クラスだ。だから大丈夫だろう」

そう締めくくると同時に椿が小屋から出てきた。

「準備は出来たか？」

「ああ、んじゃ、仕事にでも行ってみようかね」

ゴキゴキを首を左右に動かして椿が小屋から出てくる。こうして、シーナの店舗購入資金奪還作戦が始まった。

第1話 金を取り戻せ（前編）（後書き）

では、感想お待ちしております。

第2話 金を取り戻せ（後編）（前書き）

ちょっと戦闘描写がイマイチかもしれない・・・

第2話 金を取り戻せ（後編）

椿が住んでいる小屋から出て、三人はダンテローザの街へと向かう。早速街で聞き込みをしてみるとすぐにドレッドの情報が集まった。随分派手に行動しているようで、あちこちから情報が集まってきた、彼らの行動には自警団ギルドも前から警戒はしていたらしいが、レベルがそれほど高くないのと、装備の面で圧倒的に不利なので手が出せない状態だった。

集まった情報を統合して考えるとどうやら街の周辺に複数ある拠点を転々と移動し、ルスラ・ウィルドの方向から来る、自分達よりレベルの低いパーティーを襲っているようだった。

「ここら辺で待ち伏せ出来る場所は限られてるから、すぐに見つけるだろ」

椿が何でもないかのようにサラリと言ったのけた。それから数時間交代で見張りを続けていると・・・本当にドレッドの面々が現れた。狙っているのはおそらくレベル20代のパーティー、今か今かと獲物を待ちかまえている背後から二人がふらりと現れた。

「よう、ドレッドの皆様」

「ちょっとお話ししましょうかねえ？」

そう言っただけで悪魔のように二人がニヤツと笑うとドレッドの四人は逃げようとするが、それよりも速く二人が武器を抜いた。ここで逃げだせばPKギルドとしてのメンツが立たない・・・おそらくそう

判断したのだろう。

「ちっ、やるしかねえか……」

リーダーらしき男が片手剣を抜いたと同時に他のメンバーも武器を抜いた。ランス使いが一人、双剣使いが一人、魔術師が一人という編成だ。相手のレベルは32、ぎりぎり勝てるか勝てないかの瀬戸際だ。

「それじゃあ行くぜえつつ!!」

一人目の双剣使いが勢いよく突進してきた。狙いもつけずに剣を振り回すが冷静に避けてニルヴァーナがフォールビドゥンを持つ。双剣士に向けて大剣スキル《スラスト》三連撃、高速で放たれた斬撃三発の内二発が直撃して双剣士のHPを大きく削る。残りの一撃は避けられた。瞬時に柄を分離させる。柄の中から鎖が出てきて鎖鎌形態に変形した5つに別れた柄の一つを持って鎖鎌用スキル《列颯》を放つ。鎖が双剣士に巻き付いてHPバーを減らす。そこでフォールビドゥンを手放して片手に3つずつ、計6本の投げナイフを投げた。全部のナイフが双剣士に突き刺さってHPをゼロにする。ポリゴンの欠片を散らしながら双剣士が消滅した。

「椿！そっちはどうだ!!」

「無事に片付いたぜ!!」

声のする方を見ると槍使いと片手剣使いがいなくなっていた。地面には彼らが装備していた片手剣と両手槍が転がっていた。レベル差はそれほど無かったはずなのだがあっさり倒している。

「てめえらつつつ!!」

リーダーの片手剣使いがニルヴァーナに迫り来る。かつて、自分をPKしたレイズも片手剣使いだったが今はあるときとは状況もレベルも、何よりニルヴァーナ自身が大きく変わっていたため、難なく反撃に転じた。残っていた投げナイフを投げる。片手剣使いのリーダーがそれを弾いている隙にフォービドウンの柄を掴んで引き寄せる。時間はわずか一瞬、だがその一瞬が全てを決める、柄同士をつなぐ鎖の音を響かせて彼が剣を引き寄せる。5つある内の刀身と合体している柄を持ってどレッドのリーダーに投げた。リーダーの男は何が起きたのかを理解する前に地面に倒れ伏した。そこで縄を持って待機していたシーナがリーダーを縛り上げる。こうして、PK討伐戦は幕を下ろした。

16:34 ダンテローザ中央広場

あの後、縛り上げたレッドのリーダーの話によると奪ったシーナの店の代金は半分を上部ギルドに上納、残りは自分達の武器代として消えてしまったというので、ドロップして転がっていた武器を片っ端から集めて売ったがさすがに全額を取り戻すことは出来なかった。

「すまん、取り戻せなかった」

日が傾いてきた街の噴水の前で少女に頭を下げる男二人・・・端から見れば何があったのか気になるところだ。だがあのシーナは嬉しそうだった。

「そんなに気にしないでください。半額取り戻せただけでも充分ですよ」

「しっかしなあ……」

椿はまだ納得できないらしい。意外と律儀な奴なのだ。気にしないでと続けながらシーナが言葉を続ける。

「私、また路上で武器を売りながらお金を貯めようかと思ってます。今回取り戻せたVで新しい機材は買えますし、もうちょっといろんな世界を見て回ろうかなって」

シーナがそう言って二人に負けないくらい深々と礼をする。その時、椿が何かをひらめいた顔になった。

「なあ、嬢ちゃん。ものは相談なんだが俺の家を間借りしながら武器屋をやるってのはどうだ。最近料理スキルを上げる機会があつて、ちょうどいいからあの小屋で茶店でもやろうかなって思ってたが、そこに武器屋があれば客も寄ってくるんじゃないか……って思ってた。どうだ？」

椿の思わぬ提案に二人が啞然となるがしばらくすると二人が笑い始めた。

「ご迷惑でなければ……お願いします!!」

「おうよ、交渉成立だな!」

面白そうに椿が言った。

「あ、それと、ニルヴァーナさん。武器の整備をして欲しかったんですよね」

「そうだな、出来るか？」

「はい、数日でもしたら完全に元に戻ってますよ！」

こうして、シーナは椿の小屋を間借りして店を開き、ニルヴァーナは無事にフォービドウンの修理をすることが出来た。

それから三日後、ニルヴァーナが街を出て行く。次の新しい拠点となる街に移動するためだ。街の外には椿とシーナが見送りに立っていた。

「またなんかあつたら来いよ」

「武器の整備をしなくなったらまた来てくださいね！ありがとうございます！！」

「二人とも元気だなー」

そんなあいさつを交わしてニルヴァーナは新たな街へと向けて歩き始めた。

第2話 金を取り戻せ（後編）（後書き）

では、感想お待ちしております・・・というよりもすごく切実なお願いです。感想を待っております。

第3話 黒猫騎士団（前書き）

ここから暫く戦闘シーンはありませんのでご容赦のほどを・・・。

第3話 黒猫騎士団

イレーディア森林保護区 13:44

遠くでは雷を伴った雨が降っている。針葉樹林が鬱蒼と広がる森の中をニルヴァーナは歩いていった。現在、彼のレベルは41。拠点にしているのはダンテローザから北上して、森の中にひっそりと存在している村『ロレイシア』を拠点としていた。服装は麻のシャツの上にダークグレーのベスト、ダークグレーのズボンに黒いブーツ、そして茶色のハーフコートを着ていた。

今日は森の奥にある洞窟でフォービドウンの強化用素材を取りに行った。ニルヴァーナには苦手な場所がある。それが森や雪原で、こういう音が反響しそうな森や、音を吸い込む雪原を歩いていると自分が一人で行動していると再認識してしまう。ソロプレイだから仕方がないと言えば仕方がない。そんなことを思っていると、どこからか戦闘音が聞こえてきた。ここはいわゆる街道から外れているのでそれほど通行量は多くはない。来るとすれば素材の収集かレベルアップのどっちかだ。音を頼りに森の中を走っていくとすぐに見つかった。パーティーの人数は5人、相手はこの森でよく出てくるアイスウルフが4匹いた。

パーティーを組んでプレイしたことがあまりないニルヴァーナからみてもそのパーティーはずいぶん変則的な編成だった。前衛は盾を持った片手剣使いが一人だけ、あとは両手槍を持った二人と魔術師が一人、僧侶が一人だけだった。あれでは前衛とスイッチする要員がいなかったためズルズル後退してしまうパターンだ。

見殺しにするのも気が引けるので彼は背中に背負っているフォービドゥンを抜いた。そのまま隠れていた茂みから飛び出してアイスウルフに切りかかった。このフィールドのモンスターの平均レベルは25、今のニルヴァーナなら難なく狩れる。フォービドゥンをHPの減りつつあったアイスウルフに叩きつける。まず一匹目、鎖鎌形態に変形させてまとめて二匹のHPを削る。そこで回復を済ませていた片手剣使いとスイッチ、片手剣と槍の攻撃を立て続けに受けてアイスウルフ二匹がポリゴンの欠片を散らした。残る一匹はある程度HPが減っていたので彼らに任せることにした。最後のアイスウルフがポリゴンの欠片となって砕け散ったとき、5人組は盛大に歓声を上げた、互いにハイタッチを交わしている。数人がニルヴァーナともハイタッチを交わした。今までかなりの数のパーティーを見てきたがここまで喜んでいるパーティーを見るのは初めてだった。

「ありがとうございます、ここで狩りをしてらしたんですか？」

リーダーと思われる片手剣使いが話しかけてきた。

「ええ、武器の強化用素材を集めている最中でして……そちらに被害はありませんでした？」

「特にはありませんね。それと……勝手なお願いかも知れませんがレヴィーサまで護衛を頼んでも大丈夫ですか？」

どうやら彼らはこの森の先にある港町レヴィーサに向かう途中だったらしい。

「ちょうど自分も拠点を移そうかなと思っていました。そっちが良ければご同行いたします。あ、おれの名前はニルヴァーナ、呼び捨てにしてくださいませんか？」

「わかった、僕の名前はクレインだ。よろしく、ニルヴァーナ」

そう言つて二人が握手した。それからの道中は穏やかなものでモンスターに遭遇するわけでもなく、順調な旅が続いた。レヴィーサに着く直前クレインが再び彼に話しかけた。

「なあ、君が良ければいいんだけど、僕たちのパーティに加わってもらえないかな？別にニルが嫌だったら強制はしないんだけど、このパーティって前衛があまりいないからね」

クレインの言葉に彼は珍しく迷つた。いつもならあっさりと跳ねのけてしまうのだが、なぜか迷つてしまう。結局彼が出した答えは……。

「反対意見がないなら加わらせてもらうよ」

「ありがとう、ニル。みんな、今から彼が新しく入るけど、反対意見とかないよねー」

クレインがメンバーに尋ねてみる。新しい仲間が増えたのが嬉しいのか、このギルド……『黒猫騎士団』の面々は盛大にニルヴァーナのパーティ加入を歓迎してくれた。メンバーの名前は長槍使いガ

リーナとカケル、魔術師がリスト、僧侶がナインという名前だった。

「じゃあ、よろしく」

レヴィーサは北の海に面した港町で海には氷が張っている。街に
いるNPC達の服装もどこか北国を連想させる。

「今日は僕たちここで落ちるけど、明日からは……僕も含めた全員のレベル上げかな。ニルも手伝って貰うことになるけど、大丈夫？」

「ああ、俺もレベルアップしときたいからな。それじゃお疲れ」

「うん、よろしく。それじゃあ」

そう言っただけでクレイン達が宿屋の方に向かって歩いていく。それを見送ったニルヴァーナは再び森の方に向かって歩き出した。だが彼の顔はレベル上げにいそしんでいた頃の彼と違い、今までになく輝いていたという。こうして彼は正式にクレイン主催のギルド『黒猫騎士団』に入団した。

第3話 黒猫騎士団（後書き）

では感想お待ちしております。

第4話 転機（前書き）

戦闘シーンがありません、重ね重ねご容赦のほどを・・・！

第4話 転機

それから数週間、ニルヴァーナがパーティーに加入して以降、黒猫騎士団の戦力は大幅に上昇した。これはメンバー全員が予想外だったらしく、そのことを盛大に祝ったりもした。そして、黒猫騎士団にあるギルドが声を掛ける。ギルド名『碧衣の旅団』前衛職と後衛職のバランスが釣り合っている理想的なギルドだが、最近は脱退者が増加し、新規入団者が減っているという。そこで焦った幹部の連中は外部から新しい入団者を増やした。その中の一つに黒猫騎士団の名前が入っていたのである。そして黒猫騎士団が碧衣の旅団の傘下にはいつてから数週間後、事件は起きた。

その日、黒猫騎士団がいつものように街の外に出ようとすると。団長であるジェスがもう一つのパーティーを連れて行って欲しいと頼んできた。連れて行く相手は旅団の中でも悪名高い『我俣お嬢様』ミルティだった。愛らしい外見を武器に彼女は団内の立場を瞬く間に築き上げる。レベルもそこそこあるのだが、戦闘するのはいつも彼女の取り巻きで、ハッキリ言ってしまうえばレベルに対し実力が恐ろしいほど伴っていないのだ。

「ふーん、あんた達が今日のあたしの護衛なんだ。ま、せいぜい盾としての役割は果たしてもらおうわよ」

あいさつもなしにいきなり高圧的な態度でそう告げてきたミルティに一度は全員が依頼を放棄しようとしたが団長であるジェスがそれを許可しなかった。彼自身もミルティのファンだったため、誰も彼女の横暴を止められなかった。彼女の我が儘っぷりに付き合いきれず徐々に『碧衣の旅団』は力を失っていく。

最後のアーマードゴブリンの一団がニルヴァーナとクレインの連携攻撃によって倒される。クエスト目標であるアーマードゴブリン五十体の討伐クエストが無事に終了した。

結果からいえばその日の狩りは散々だった。黒猫騎士団が苦戦しているときでも、ミルティとその取り巻き達は回復ひとつせずに傍観しているだけだった。かといえ、アイテムを分配するときになると会話の中に入り込んできて・・・。

「あんたらのくっだらないレベルアップに付き合っただけだから。アイテムは当然私たちが多くもらえるのよね。感謝しなさいよ。ミルティ様のおかげで今日も無事にレベルアップできましたって。ほら、言いなさいよ」

その場合はニルヴァーナが強引に納めることに成功したが、余りの身勝手さに一度は退団も考えた。だが一部の良識的な幹部達の頼みを断ることは出来ず、ずるずるとそのまま在籍し続けることになった。だが、それが決定的な間違いだったと気付いたときには全てが遅くなっていた。

その時からニルヴァーナは黒猫騎士団と離れて行動するようになっていた。ミッションも黒猫騎士団のメンバー以外と行くようになり、そうなってくると互いの会話も疎遠になってくる、そして更なる事件が起きたのはある雨の日のことだった。

久しぶりに呼び出されて黒猫騎士団のメンバーの元にいつてみると・・・全員が淀んだ目をしていた。どこか生気の欠けた瞳。原因を聞いてみると、きっかけは黒猫騎士団があるレア長槍を手に入れたことだった。通常なら騎士団にいる両手槍使いの二人の内で話し合いが行われるのだが、その日は運悪くミルティがついてきていた。もちろんミルティはその槍を寄越せという、その日は何とか引いた

もののその日以降、様々ないやがらせをしてくるようになった。リーナが一人でいるところを狙って取り巻き数十人で囲み、様々な罵詈雑言をぶつける、ある意味恐喝だ。団長にも相談したがまともに取り合ってもらえない。そして、余りのしつこさに心が折れてリーナが槍を渡すと、それをさも譲ってもらったかのように振る舞う。一度殴りかかったことがあったが取り巻きと団長にことごとく返り討ちにされ、彼らの心もまた折れかけようとしていたのだ。

だが、ニルヴァーナは彼らを慰めることしかできなかった。そしてそれが決定的な事件へとつながっていく。その翌日、ミルティが再び黒猫騎士団を呼び出した。その内容とはあるボスモンスターの攻略で、数日後に騎士団が攻略する予定だったのだが、情報が少ないと言ふことで黒猫騎士団に情報収集を命じたのだ。だがミルティ達の目的は別で、ボスモンスターにやられていく黒猫騎士団を笑うためだけの企画だったのだ。

その話をニルヴァーナが聞いたのは彼らが拠点を出発してから数時間後のこと、あわてて彼らの後を追って森の中に入っていく、そしてボスがいるエリアでは信じられないことが起こっていた。ミルティ達は高台のボスモンスターの攻撃が届かないところで本当に高みの見物をしていたのだ。取り巻きに守られながら黒猫騎士団がやられていく様子を見せ物のように楽しんでいる。そして・・・ニルヴァーナの前でリーナがポリゴンの欠片となり、相次いで黒猫騎士団のメンバーがやられていく。それを眺めながらミルティは大笑いしていた。そして・・・彼が来ていることに気がついたクレインが声を掛けようとした瞬間、クレインがポリゴンの欠片となった。目の前で、仲間が散っていくのを目の当たりにしたとき、ニルヴァーナの中で何かの鍵が弾けた。暗い獣が鎌首をもたげるような感覚、彼はフォービドゥンを背中から抜き放つと、目の前のボスモンスターに向けて歩き始めた。

数回死にかけて、自分の持っている回復アイテムを全て使い切り、HPバーも赤に突入し、武器の耐久度もほぼ限界に近くなっていたが、それでもニルヴァーナは勝った。ポリゴンを散らしてボスモンスターが消えると、そこにはボスが持っていた長大な大剣が刺さっていた。自分の身長を軽く超している。そこで後ろから拍手が聞こえた。

「ふーん、あんな奴らと仲良しこよしだったからあんたも大したことないって思ってたけどなかなかやるじゃない。じゃあその後ろに刺さってる剣を私に頂戴、そうすれば、あんたも私の取り巻きに加えてあげる。どう、いい話でしょ？」

ミルティがいつもと変わらず見下した態度でニルヴァーナに話しかける。だが、次の瞬間、ニルヴァーナは大剣を引き抜いてオブジエクト化、それをポーチに入れる。

「何のつもり？あたしに逆らうとどうなるか、解ってるでしょ。あんたみたいな一人退団させるなんてどうってことないのよ？」

「調子に乗るなよクソガキ、お前の特権振りがささなくても、こんなバカのご機嫌取りしかいないようなギルドなんざこっちから辞めてやる！」

そう言うと同時にニルヴァーナがポーチから何かを取り出した。一見すると巫女や魔術師が使う護符や御札のようにも見える。『転移の護符』このアイテムはあらかじめ設定しておいた目的地の近くまで転送するというものだ。まさかここで使うことになるとは思

もしなかったが今はこれがこれ以上ない最上の策に思えた。ミルティとその取り巻きが迫ってくる前に彼は光と共に姿を消す。空中に浮いていた護符はその直後に青白い炎とともに燃え尽きた。

ダンテローザ郊外 椿の小屋

外はしとしと雨が降っている、一時の掘っ立て小屋のような造りだった椿の小屋は現在、時代劇に登場するような茶屋になっていた。一応簡単な料理スキルを持っている椿は茶屋その他のお菓子を作ることなどたやすい。だが、ここは鍛冶屋も兼ねていた。小屋の奥にはシーナ専用の工房がある。客はシーナが武器の整備している間の空き時間を椿が作った茶をすすったり、雑談しながら過ごす。最近では整備の質と茶の美味さから固定客がつくようになっていた。店の売れ行きも順調だ。

「雨ですね……」

「雨だな……」

軒先の長椅子に座って二人が曇天の空を見上げる。周囲には誰もいない、雨の音だけが静かに響いていた。

「あ、椿さん。あれって……」

「お、ニルじゃねえか……ってあいつどうしたんだ？」

雨の中を歩いてくる彼の姿は心なしかいつもより沈んでいるように見えた。

「よう、どうしたんだ？」

「……椿か、ちょっとな。いろいろあった……シーナ、大剣の刀身をこれに移植することは出来るか？」

そう言って背に装備していたフォービドゥンを指さす。

「出来るけど……どうしたの？」

不安そうにシーナが尋ねる。

「ちょっとやっておこうと思ってな。頼めるか？代金は……いくらだ」

「今回だけはタダにしておくから、ゆっくり休んで……ね」

シーナがそう言つと奥の工房へと向かう。

それを眺めながら、彼は長椅子に腰掛けた。

「何があつたんだよ」

「……何でもねーよ、気にするな」

そう言っつて気弱に笑うニルヴァーナ。

「そうかい」

そう言っつて雨が降り続く空を見上げる二人。工房の準備が出来る

まで二人の間に会話は一切なかった。

シーナに渡した身の丈以上の大剣『ルミナリア』の刀身の移植は成功し、前に使っていたものより遙かに強化されていた。その刀身は青白く輝いている。こうなってくると重さのせいで剣が振れなくなるためシーナに頼んで簡単な術式を刻む。今回使用したのは重量減少50%の術式、これで大いぶ楽に振れるはずだ。

「あれ、ニルヴァーナさんは？」

「なんか街の方に服を取りに行くってさっき出てった……そろそろ戻ってくる頃だとは思うんだが……お、戻ってきた」

椿が外を眺めているとニルヴァーナが戻ってきた。だがその服は行く前とは違い黒一色でまとめられている。シャツまで真っ黒のスーツの上に真っ黒なロングコート、そしてロングブーツも金属パーツ以外は黒だった。腰の部分にはコートの上からベルトが巻かれている。

「出来てるか？」

「ああ、出来てるんだが……お前、その格好はどういうことだ？」

「これか。簡単に言ってしまうえばアレだ。決意表明って奴だな」

そう言っ て工房の方へと入っていくニルヴァーナ。工房から剣を持って出てきた彼はもはや以前の彼とは別人だった。

「それじゃあな」

そう言って、ニルヴァーナは雨の中を歩き始めた、決して振り返ることなく、静かに歩き始めた。

この直後、BWOは大きく方針を転換する。カテゴリーも中世ファンタジーの世界から、現代ファンタジーへ、それと同時に様々な追加要素を加えた大規模なアップデートが行われた。このアップデートで新たに加わったのは、空中都市や戦闘用の開発された魔導アーマー、新大陸などが目玉となっている。それ以外にもアイテムや装備が更新され、新しい武器や設備、職業などが作られた。そしてそれは新たなBWOの幕開けでもあった。今回のアップデートにより新規プレイヤーが大幅に増え、BWOは更なる盛り上がりを見せ始める。

第4話 転機（後書き）

今回からニルヴァーナが着ている服は簡単に言ってしまうえばFATE/ZEROの切嗣の格好にいくつかパーツを加えたような感じ
です。次回以降は著アント戦闘描写もありますのでご安心下さい。
それでは、感想お待ちしております。

第5話 復讐三日前（前書き）

巨大兵器VS人って面白いですよね、多分。

第5話 復讐三日前

アップデイトから1ヶ月後 リヴェリナ大陸 ルヴェイラ森林保護
区 19:25

ダークブルーに染まりつつある森の上を3騎の魔導アーマーが飛翔する。今回のアップデイトで加えられた新兵器の一つで、全長は5mほど。正式名称は『魔導アーマー』というが、ものすごく簡単についてしまえば巨大ロボットだ。

単騎で複数の通常のプレイヤー達を圧倒できるスペックを持っている。この魔導アーマー、騎体名『スピットストーム』は『聖十字騎士団』所属機で、一定のレベルに達した精鋭だけで編成されている。左肩には同盟を結んでいる『碧衣の旅団』のエンブレムも描かれていた。

碧衣の旅団は現在、ミルティをアイドルとして担ぎ出した戦略が当たり、アップデイト以降増えた、新規プレイヤーの確保に成功し、一応は解散の危機から脱出した。現在は再びBWO内で有名なギルドになりつつある。

この3騎は哨戒飛行中だったのだが、近くにいるギルドメンバーからの救援要請を受け現在はその要請があった場所へと向かっている最中だった。

『隊長、俺たち対空装備のままですよー』

『それに関しては心配ないだろ、何せこっちは魔導アーマーが3騎だ。相手が何であれ、余裕で勝てるさ』

『ですね……隊長、そろそろ目的地です』

通信をしつつも統率された動きで飛行する3騎の魔導アーマー。そして地上の救難信号発信地点に到着したとき……。

『この地点のはずなんだよな……？』

『はい、確かにこの地点で間違いないで……っ！』

次の瞬間3騎のコックピットにはレッドアラートが鳴り響いた。そして森の中から何十個もの小型の円盤が出てきて空中で爆発する。

『これは……！そんな、何故あの兵器がここに……！』

『どうした、何が起きてる……！』

『これは……グラビティ・マイン重力地雷です！くそっ！機体が動きません……！』

瞬く間に2騎のスピットストームが動かなくなった。そこへ地上を走り抜ける一人の男。その男は全身を黒い服で覆い尽くしていた。

『なんだ……！？』

そして次の瞬間、男が背中に装備されていた長大な剣を抜く、そして、1騎目のスピットストームに剣を突き立てた。通常の術式や武器での貫通が困難とされている魔導アーマーの装甲を易々と貫通する。重力地雷の効果が切れるのと同時に3号騎の反応が消失。残りの2騎が空へと舞い上がる。

『3号騎がやられました。隊長、指示を……！』

『俺が先行してあの男を押さえるから、シンディは後から続け！行くぞ！！』

『了解！』

隊長騎が銃を格納して青白く光る接近戦用長剣を取り出した。地面を滑走しながら黒い男に迫る。普通のPCならば一瞬でHPを削るその攻撃を黒い男は大剣で弾き飛ばした、大剣と長剣が互いに弾き合い夜空に火花が飛び散った。

隊長騎が長剣を横から滑らせるが、これもまた大剣に弾かれる。基本的に魔導アーマーを倒せるのは魔導アーマーだけといわれてきた。何せ、自分より巨大で強大な相手と立ち向かうにはそれ相応の胆力が必要になる。そして大抵の場合はそんな胆力のない人間がほとんどだった。簡単に言くと、目の前に大型トラックが走ってきたとき、ほとんどの場合、人は動くことが出来ない。隊長騎のの搭乗者はそう思っていた。

だが目の前の男は違う、魔導アーマーが出てきても動じるところか、大剣でまともに打ち合うほどだ。尋常ではない戦闘能力と精神力の賜物だと隊長騎のパイロットは思う。男が一度距離を取った、それを追って隊長騎が前へ出た。地面に長剣を叩き付ける。木が倒れ土埃が舞っている中で一時的にターゲットを見失ってしまった。そして再び警報が鳴った瞬間、隊長騎のパイロットは大きく機体を後退させた。そして、土煙の中から青白い刃が長剣ごと右腕を斬り飛ばした。すぐに上空に浮かびあがって他の場所で戦闘していた僚騎と合流する。

『シンディ！撤収だ！！』

『了解！！』

一度上空に上がってから別の場所で戦闘していた2号騎と合流する。それと同時に最大戦速で森林保護区を離れた。

「逃げられた……か」

そう言つて黒ずくめの男・・・ニルヴァーナは空を見上げながらつぶやいた。ロングコートのポケットから煙草を取り出して火をつける。紫煙が夜空に踊った。現在彼の職業は『パラディン』、レベルは59になっていた。この3ヶ月、ただひたすらにレベルを上げ、転職し、様々なスキルを身に付けた。今では格闘家の上位派生職のモンクのスキルも取得しているほか、攻撃術式に回復術式、錬金術もマスターしていた。彼のはめているオープンフィンガーグローブには錬成陣が刻まれている。そのほかにも索敵、追跡、軽業などのサブスキルも取得、ソロプレイヤーとしてある程度は有名になってきた。彼の職業でもあるパラディンは本来、防御力とHP量を生かした壁戦士だった。大型の重鎧を纏いモンスターの攻撃からパーティーを守りきる聖なる騎士。だが彼の場合は守る者はなく、聖なる騎士どころか邪悪な騎士呼ばわりされても仕方のない戦いを行ってきた。というより姿からして騎士型職業には見えないだろう。

「そつちは終わったか？」

木の陰からもう一人男が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ、片眼鏡^{クル}を掛けて、ニルヴァーナと同じように真つ黒な出で立ちの男だった。黒地に銀色のストライプが入ったシャツに黒光りする革製のベスト、黒のスラックスにブーツという出で立ちだ。あちこちにつけられた銀色のアクセサリーが存在感をアップさせている。基本的にこういうアクセサリーをつける奴はPK気取りか無頼者気取りと相場が決まっているのだが彼の場合はそうはならなかったらしい。貫禄が滲み出ている。

「ええ、無事に終わりましたよ師匠」

ニルヴァーナがそう、男に返した。彼の名はウォルター、ニルヴァーナの使う複合兵装の扱いのコツを教えた人物でもある。

「そうか、ならここから離れるぞ」

「了解」

聖十字騎士団本部 第3会議室

このBWOには様々な勢力が存在する。この聖十字騎士団もその勢力の一つでBWOのサービスが開始された直後から存在する勢力の一つだ。所属するプレイヤーは必ず支給される制服を着用していなければならないという決まりがある。それ以外は自由なギルドで新規入団者の育成も熱心に行われている。魔導アーマーの保有数はBWO内では2位という立ち位置だ。そのほかにもアップデートで追加された航空艦も大小30隻ほど保有している。

そんな聖十字騎士団の本部にある会議室では一人の女性が報告書をめくっていた。彼女の名はサビーナ、聖十字騎士団内では魔導アーマー隊の指揮官を務めている。ついさっき碧衣の旅団に派遣している魔導アーマー隊の指揮官から報告があつた。ルヴェイラ森林保護区で、魔導アーマーとともに張り合った男がいたという。結果は3騎の内1騎が撃墜、1騎が小破という結果に終わった。気になったのはこの男、恐れることなく魔導アーマーと1対1で戦っているところだ。

「碧衣の旅団には悪いがこれは当たりを引いたかもな」

にやりと笑いながらサビーナは言った。今のところ聖十字騎士団と碧衣の旅団は同盟関係にあるが幹部の何人かはミルティの威光だけで成り立っているギルドとは同盟を破棄すべきという意見も出ている。

（とりあえずは様子見しておくかな……）

彼女がそんなことを考えながら会議室を後にする。

廃都イスラ・ウィルガ 10:34

BWOで最も高い山とされているのはレイヴェア大陸の中央部にある霊峰アルバ・シエスタ。その上に建てられているのが古代時代の廃都市である、イスラ・ウィルガだった。雲に包まれたその外見から空中都市とも呼ばれている。そんなイスラ・ウィルガの中を二人の男が歩いていく。通りの一番奥にある寂れた教会の中に入る。ステンドグラスから差し込む陽光が内部を照らしていた。既に席には数人のプレイヤーがいる。

「戻ってきたか、ウォルター、ニルヴァーナ」

「ああ、戻ったぞ」

最前列の席に座る男が二人に声を掛ける。彼の名はトーヴァート、『暁の大隊』で一応のまとめ役を務めている男だ。

「さて、二人が戻ってきたところで『茶会』を始めるぞ」

そう言うとトーヴァートが目の前に通信用ウィンドウを開く。教会に集まっているメンバー全員が同時にウィンドウを開いた。

「ついさっき入った情報だが、碧衣の旅団が三日後に新しいグループを発表するそうだ。俺達はその発表中に碧衣の旅団本部を襲う。小細工無しの正面から殴り込みだ、各自盛大に暴れまくれ、以上」

簡潔に内容を話し終えるトーヴァート、それが終わると二人の女性プレイヤーがニルヴァーナのところに来てきた。一人はどこか抜けたおとなしそうな金髪の少女、もう一人は、眠そうな目に黒い髪で、両腕が機械の腕、通称『装甲腕』を装備した少女で、名前は金髪の少女がブリジットで黒髪の少女がルーナという。

「さっきトーヴァアが言ってた『碧衣の旅団』ってニルの古巣なんだよね？」

「……まあ、そうだな」

ブリジットが能天気な声で聞いてくる。

「……ためらいはないの？」

ブリジットとは対照的にルーナがおずおずと尋ねてくる。

「別に、復讐の機会が予定より早まったただけだ」

そう言うてにやりと笑うとブリジットが「わゝ悪役の笑い方だね」と言ったので適当に頭を小突く。この『暁の大隊』は流れ者やソロプレイヤーの寄り合い所帯で決してギルドというものではなかった。ニルヴァーナ自身もウォルターの紹介でここに来たようなものだったりする。全員が特殊職業や変わった戦い方をすることが特徴で、ブリジットは今回のアップデートで追加された魔術師系の上

位職『ダークビショップ』で、闇の魔術に特化している。ルーナの職業は騎士の上位職『アークナイト』、『クルセイダー』から進化した一つで、闇の魔術で強化されている。ウォルターの職業は盗賊の派生職業の一つ、『アサシン』本来は隠密行動で相手を倒したりするのだがウォルターの場合はこそこそ隠れて攻撃せず、堂々と相手の目の前に出て、腰に差している軍刀二刀流で次々と相手を斬り伏せていくので最初は誰が見ても双剣士にしか思えない。実際『暁の大隊』メンバーもほぼ全員がそう思っていた。それでついた渾名が『忍ばない暗殺者』という怪しげな二つ名をもらうことになった。

「もうすぐニルはレベルアップだったよね？」

「あー、そうだな」

「私たちもレベル上げしたいから、狩りに行こう？」

ブリジットとルーナに両側を押さえられてしまった。こうなると後は従うしかない。三人でイスラ・ウィルガを離れる。その日の内にニルヴァーナのレベルはついに60代に突入した。

第5話 復讐三日前（後書き）

では、感想をガンガンお待ちしております。では次回もお楽しみに。

第6話 報復の日

三日後、『碧衣の旅団』の重大発表が行われている会場に向かつて5人のプレイヤーが歩いていった。今回の襲撃を担当するトーヴァー、ウォルター、ニルヴァーナ、ブリジット、ルーナの五人だ。会場ではマスコットであるミルティが演説をしている。どうやら新しいギルドに関する通達なのだそう。だが、次の瞬間に耳に入ってきた言葉は彼を怒らせかねないものだった。

「今夜、私はここに『黒猫騎士団』のギルドを立ち上げることを宣言しまーすっ！みんなーよろしくねー」

会場中から大歓声がわき起こる、壇上にいる『碧衣の旅団』旅団長のジェスもだ。あまりのことに今すぐ彼は飛び出しそうになった。かつての仲間達をあれだけ傷つけたというのに、まだ足りないというのか、まだ彼らから奪うというのか、怒りのあまり突撃しそうになるが・・・。

「落ち着け、ニルヴァーナ。冷静になるんだ、今はまだその時ではない」

「そーそー、もうちょっと盛り上がってからだね」

「落ち着いて、ニル」

三者三様の励ましのおかげで、彼は冷静な思考を取り戻す。壇上ではミルティによるコンサートが行われていた。会場のボルテージがどんどん高くなっていく。そして最高潮に達したとき、トーヴァ

ートが指示を出した。

「それでは始めるぞ。戦争開始だ」

その言葉と同時に全員が武器を持った。会場のあちこちから悲鳴が上がる。

「おい、この会場内は戦闘禁止……」

旅団のメンバーの一人が注意しようとしたが最後まで言い切ることなくその身体がポリゴンとなって砕け散った。トーヴァートが静かに言う。

「今から解禁だ」

異変に気がついたのか周囲の観客達が武器を持った。あこがれのミルティを守るためだろう。全くもって、度し難い、あの女に守るほどの価値があるとは思えない。どうせ、すぐにまた本性を晒す。そうなったら、またクレイン達の二の舞だ。

「ちょっと何なのよあんだ達！私に武器を向けたらどういうことになるか教えてあげるわ、行きなさい下僕ども！！」

それと同時に会場に集まっていたプレイヤー達が武器を構え始める。ミルティが命令を下す直前、彼らが動いた。ブリジットが背中の翼を広げて空へ浮かび上がる、その翼には幾何学模様が刻まれていた、そして、幾何学模様が青白く輝き始める。それと同時に彼女の目の前に巨大な魔法陣が現れた。ハイウィザード達が集まってもなかなか発動させることの難しい大魔法の陣が少女一人によって行われていた、しかもその魔法陣が二つ、これがブリジットの二つ名

の由来でもある。『魔法爆撃機』、成功する確率が一桁という困難な術式を制御し、それを複数出現させ、何もかも焼き尽くすことからその渾名がついた。そして、彼女が杖を振ると同時に術式が解放される。下の四人に迫っていたプレイヤーが一瞬にして砕け散った。まさしく爆撃だ。尤も、あまりに広範囲すぎるのである程度距離をとっていないと自分達が攻撃されるというリスクが付いてくるのだが『暁の大隊』メンバーは意図を理解していたのでダメージを食らうことはなかった。

「ふ、ふん！そんな奴らの代わりなんていくらでもいるわ！でもこれならどうかしら？行きなさい、ケルベロス！！」

壇上の背後から三首の番犬が出てきた。数は3匹、何かの見せ物に使う予定だったのだらう。ミルティによって手なずけられている。

「そいつらを噛み殺しなさい！！」

三匹のケルベロスが一番近くにいたニルヴァーナに迫ろうとするが、彼が、フォービドゥンの柄を分離させた。そして、ケルベロスが飛びかかるうとしたときそれは起こった。

「征くぞ、ブラッドプリズン鮮血牢獄！！」

その一言と同時に、ニルヴァーナを中心に鎖と刃が宙を舞い次々とケルベロスを屠り始めた。どうやらケルベロス自身のレベルはそれほど高くなかったらしい。次々とダメージが蓄積されていく。数分後、空中で三つ欠片が舞った。今の技はプレイヤー自身が編み出すスキルの一つで、鎖鎌用の攻撃スキルと大剣用の攻撃スキルを組み合わせたもの。曰く、その牢獄の中で囚われた敵は鮮血を散らす。そのことから鮮血牢獄という名前がついた。青白い欠片の舞う中で

ニルヴァーナが言い放つ。

「吼えるな、駄犬!!」

まさか秘蔵のケルベロスが一瞬で蹴散らされるとは思っていなかったのだろっ、ミルティが取り巻きを盾にして逃げ始めた。尤もその取り巻き達もすぐにウォルターとトーヴァートによって、ものの数分で狩られてしまった。圧倒的すぎる、そして肝心要のミルティは会場の一番奥にある小部屋でガタガタ震えていた。何故自分が襲われるのか分からない、何故自分が命を狙われるか分からない、そして、扉が開いた。あの四人を倒した取り巻きかと思つて顔を上げると、そこにいたのは取り巻きではなかった。黒い服を全身に纏つた男が目の前に立っている。

「あ……あひ……」

声にならない悲鳴を上げてミルティが逃げようとするが壁にぶつかった。目の前からは男が迫り来る、怖い、怖い、怖い、自分が殺されると分かっているからなのこと怖い。

「あ、あたしが何したつて言うのよ!―別に何もしてないじゃない
《……………》!」

だが、その一言がいけなかった、ニルヴァーナが大剣をミルティの近くに振り下ろす。床が碎け散った。

「もういい、言い訳くらい聞いてやろっと思つたが聞く気も失せた。
おまえは今ここで消えてもらっ」

「ぶっざけんじゃないわよ!―」

ミルティが腰の鞘に装備していた剣を抜いた。だが、その剣すらもフォービドゥンによって耐久値を削られる。

「これは、お前にやられた黒猫騎士団の分だ、受け取れ！」

分離させた大剣の刀身がミルティの体に突き刺さる。一撃でミルティのHPが底をついた。彼女の体がポリゴンの欠片となって砕け散る。

「やっと終わったか」

「ええ、無事に終わりました」

部屋の外にはウォルターとブリジットが待っていた。ウォルターが冷静に聞いてくる。同じように静かに返すニルヴァーナ。

「じゃ、帰ろう。もうすぐ大挙してここに聖十字騎士団の連中が押し寄せてくるって」

ブリジットが彼の手を引いて外へ出ていく。外ではトーヴァートとルーナが待っていた。

「では、撤収だ」

その一言で全員が会場の外に出ていく。こうして、彼の復讐は終わった。この事件は後々『碧衣の旅団』襲撃事件として大々的に捜査が行われた。戦闘のどさくさにまぎれて脱出した団長の情報により、下手人は見つかるかに思えたが捜査は難航、ミルティの威光だけで成り立っていた『碧衣の旅団』の敵は多く、その影響もあつて

手伝う者は皆無だったという。こうしてニルヴァーナの復讐は一旦
終わりを告げたかに見えた。

第6話 報復の日（後書き）

では、感想お待ちしております。

第7話 幕開け（前書き）

過去編最終章！

第7話 幕開け

ロヴェエラ火山 火口付近 23:45

溶岩が空を赤く染めている。その中をニルヴァーナは一人で歩いていく。あの事件から数カ月後、『暁の大隊』は解散した。リーダーであったトーヴァートの行方が分からなくなったのだ。それによりギルドは解散、同時に彼の師匠でもあったウォルターも姿を消した。ブリジットやルーナからも誘いを受けたのだが、今は一人でいいと断ってしまったのだ。

（それに、こんな重罪人が一緒にいたらあいつらにも迷惑が掛かるだろ）

そんなことを考えながら山を登っていく。火山の山頂には一匹の竜が棲んでいる。今回の依頼はその竜の討伐だった。麓の村であらかじめクエストに関する情報を集め、竜の活動時間となっている夜にこうして行動している。彼がここに来たのに特に理由はない、ただ、敵を狩るためにこうしてあちこちを渡り歩いている。上空から飛翔音が聞こえてくる、いよいよ今夜の狩りの相手がやってきた。黒い体躯の巨大な竜だ。背中に装備されている剣を抜く。

「さて……征くぞ！」

その言葉と同時に竜の懐へ猛然とダッシュ、まずは通常攻撃5連撃、派手にエフェクトが散る。竜が咆吼して空へと飛び立とうとしたが、その翼に大剣の刀身が突き刺さる。バランスを崩して地上へと落下する竜。だがすぐに立ち上がると、火炎プレスを3回放った。全て避けつつ、再び距離を詰める。竜の顔面に大剣用3連撃スキル《トライ・ストライダー》が直撃する。体勢を大きく崩したところ

に追い打ちをかけようとしたが、そこで、竜の尻尾による攻撃がニルヴァーナを吹き飛ばした。一撃でHPの五分の一が持つて行かれてしまう。地面に叩き付けられてそのまま滑走するニルヴァーナ。起き上がってにやりと笑う。

「久しぶりに楽しめそうだ」

そうつぶやくとニルヴァーナは再び地面を強く蹴った。

旅団が解散して以降、彼はクレイン達『黒猫騎士団』のメンバーに会うことが出来なかった。仕方のない話だとは思う。それでも彼は時々思う。もしあのとき、クレイン達が『碧衣の旅団』の誘いを断っていたらどうなっていただろうかということを。何か変わっていたかもしれないし変わらなかったかもしれない、だが全てはもう過去のことだ、今更過去のことを悔やんでも、彼らが戻ってくるわけではない。そして、起こってしまったことに対しては自分で責任を取るしかない、例えそれに自分の意志が関わっていなかったとしても・・・だ。だから彼は剣を振る続ける、振るうことを辞めない。辞めてしまえば『黒猫騎士団』壊滅の責任から逃げたことになってしまうからだ。だから今日も彼はこうして剣を振り続ける。

目の前の竜は身体の一部がはがれ、翼や顔もボロボロだった。尻尾は既に斬り飛ばされ、足の爪も割れてしまっている。対するニルヴァーナもそれに負けず劣らず満身創痍だった。手に持っているのはフォービドウンではなく、錬金術で作り出した真つ黒な剣を持っている。フォービドウンの刀身はついさっき折れてしまった。ここ最近の過激な狩りと今回の戦闘で消耗していたらしい、碌に武器耐久度を見ていなかったツケだ。刀身の一部は竜の背中に突き刺さっている。回復アイテムも大分使ってしまった。

（ここまでやって倒れないのも久しぶりだが……勝てんのかこれは？）

そんなことを考えつつ、両手に持った剣を振るう。竜のあちこちには剣が突き刺さっていた。それが戦闘の激しさを物語っている。

（くっ！）

火炎ブレスを避ける。再び距離を詰めて竜の頭に一撃を見舞う。竜が苦しげに咆哮するが、それに構わず更に攻撃を続ける。竜の顔に派手なエフェクトが散った。

さらに数回死にかけて、手持ちの回復書いて無も使い切った直後、ついに竜が地面に倒れた。ポリゴンの青白い光とともに竜の体が消滅していく。そのあとに残ったのは素材アイテムと黒い大剣だった。しかも、フォービドゥンに負けず劣らず長大な剣だ。近づいて剣を引き抜く、剣そのものが真っ黒で、柄もかなり長い。

「持って帰るか」

大剣を鑑定してもらうために火山を離れる。転移用のアイテムを使って、街でも有名な鑑定屋に見てもらった。そこで分かったのはこの大剣の銘とステータスだった。大剣の銘は『ティアマト』黒い長大な刀身に十字架が突き刺さったようなデザインの大剣で、柄には白い包帯のようなものが巻かれている。

（こいつが当分のメイン装備だな）

そんなことを思いつつ現在拠点にしている街『クロスリアード』の中央通りに出ようとしたとき……遠くの方で爆音が聞こえてき

た。本来なら町中では鳴り響かないはずの音、それが鳴り響いている。今回のアップデートで行われたのは街の戦闘フィールド化で、宿屋や一部の建物の中以外、街は全域が戦闘可能になっているのだが、基本的に『街では戦闘を行わない』という暗黙の了解があるため、基本的には戦闘は起こらないはずなのだが、その音が響いていた。夜のクロスリカードが燃えている。遠くでは火の手が上がっているのが分かった。それと同じく街から脱出しようとするプレイヤー達が走ってくる。

「おい、何が起きてるんだ?!」

「なにがって……あいつらだよ!亡国の騎士団の連中だ!」

亡国の騎士団……聞いたことがある。謎の多いギルドでこの世界のあちこちで戦いを繰り広げている連中だ。構成員の数も、戦闘能力も、拠点の位置も何一つ分かっていない。

「亡国の騎士団……か」

気が付くと、いつの間にか中央通りに立っているのは、ニルヴァーナだけになっていた。そして……通りに一人の女性が現れた、白い重鎧を着て、白いマントが翻っている。手には巨大な槍を持っている。

「貴様は何者だ?」

「俺は……ニルヴァーナ、見ての通り大剣使いだ」

「そうか、私はコーデリアという。見ての通り槍使いだ」

そう言ってコーデリアが背負っていた槍を振るう、その槍には見覚えがあった、白と黒が入り交じったデザインの槍、あれは……。

「魔槍グングニル……存在したのか」

「一目で判断するとはなかなかだな。では……征くぞ」

それと同時にコーデリアが前へ飛んだ。グングニルが石畳に大穴を穿つ、バックステップで避けるとニルヴァーナもティアマートを抜いた。コーデリアがグングニルでティアマートを弾く、闇夜に火花が飛び散った。白と黒が交錯する。いつの間にか二人の周囲の建物は全てが炎に包まれ、炎の灯りが二人を照らしている。そして、コーデリアが再び前に飛んだ。それに合わせてニルヴァーナも前へと飛ぶ、そして……。

夜の街に青白い雷光が迸った。

この事件での被害はクロスリアードの市街全域が全焼、宿屋やクレスト受付場などは残ったが、それ以外の場所はほぼ全てが燃えてしまった。そして、燃えさかる街の中心で戦っていた黒コートの大剣使いと白い鎧の槍使いの姿は忽然と消えていた。だがそれを気にすることなくBWOは盛り上がっていく。

物語はまだまだ終わらない。

第7話 幕開け（後書き）

今回の話をもって過去編は終了です。次回からはいよいよ本編が開始されます。投稿まで少し時間が掛かるかもしれませんが、なるべく早く投稿する予定です。では感想お待ちしております。それでは！

第8話 日常（前書き）

新章というか、本編スタート!!

第8話 日常

クロスリカード火災事件から数ヶ月後 ウェトナ平原 22:56

青白い二つの月の下に1人の男がいた。ぼさぼさの黒髪で服装は剣と魔法、ファンタジーの世界をブチ壊しそうな服・・・スーツにロングコートブーツという出で立ちだ。シャツも黒で第1ボタンとネクタイを緩めている。コートが風にはためいている。口にはくわえ煙草。100%ハードボイルドな雰囲気^{プレイヤー}の男だ。

「おい、オッサン」

いかにも軽そうな風体のプレイヤー・・・放っている雰囲気からプレイヤー狩りを楽しんでいるPKの男女が4人。構成は片手剣使いが2人、魔術師1人、双剣士1人、リーダーは双剣士の女PCらしい、性別固定・・・つまりネカマではなく、あのキャラクターを操っているのは本物の女性なのだろう。

「何だ」

「俺達さア、金に困ってるんだよ、だからさア……」

「恵んでくれ……か」

「物分かりよくて助かるよ・・・オラ、さっさと出せよ」

「邪魔だ、どいてろ」

そう言つてPK四人の横を通り抜けようとしたとき、PKの一人が武器で彼の通路を遮った。

「何無視してんだヨ、話はまだ」

頭をモヒカンにした片手剣使いは最後まで言葉を言い続けることができなかった。理由は簡単、モヒカンが男によって倒されたからだ。

「デメエツ！よくも……」

双剣士の女性PCが迫るが甲高い音によってその剣が防がれる。

「え……？」

双剣士が間抜けな声を出した、次の瞬間男の長大な剣が双剣士を切り裂いた。黒と白の刀身に透き通るような水色の刃に白の柄、刀身には金色の逆十字が描かれていた。呆然としている二人に今度は男が攻撃に移った、前にジャンプ、一瞬で距離を詰める、あんな大剣を軽々と片手剣でも振るつかのような筋力値もそうだが、一気に距離を詰めてきた跳躍力も尋常ではない。

「くっ！」

狙われた魔術師が反応するよりも早く大剣の一撃が魔術師をポリゴンの欠片に変えた。

「う、うわあああああああつ！」

仲間がやられた恐怖のあまり、最後の一人が逃げ出そうとしたが・
・。

「お友達を置いて逃げるな」

そういったとき大剣の柄が5つに分離、柄と柄は鎖鎌のように鎖でつながっていた、その1つの柄を男が持つて投げる。大剣の刃が男に命中。片手剣士がポリゴン化して消えた。あたりは何事もなかったかのように静まり返っている。男が大剣を元に戻して腰の後ろの鞘に剣を納めた。コートのポケットから煙草を取り出してライターで火をつける。男の名前はニルヴァーナ、大剣の刃に分離する柄を持ったハイブリッド武器の刀身には『ティアマトー』という文字が書かれていた。

リンデリータ 19：44

ニルヴァーナはここ最近の拠点にしている街の一つ、リンデリータへ戻ってきた、周囲を広大な樹海に囲まれた街で自然を生かしたファンタジックな街にダークスーツとロングコートは雰囲気的に合っていない、中世の甲冑のような鎧を着たPCが大通りを歩いて行くのを見ると一層そう思う、が大して気にしない。

彼の職業は大剣士や槍使いの上位派生職業の1つ、パラデイン。レベルは82、基本的にパラデインはその職業である大剣士や槍使いの特性を受け継ぐため、技も似たようなスキルしか引き継がない、複数のPCでパーティーを組む時は援護として魔術師や僧侶を組み込むのが、セオリーだが彼の場合は今の職業になる前に魔術師が使用する術式や錬金術にも手を出しているため、本来なら複数人で行動しなければならぬところを単独で行動できるようにしている。

行きつけのリンデリータにある大衆酒場に入る、手っとり早く情報を手に入れるには酒場が一番、という認識はあながち間違っていない。入ってすぐのところには巨大な掲示板がある。ギルドメンバー

の募集や特殊クエスト、PK禁止などの張り紙が所狭しと貼られている。手近なテーブルに座ってシステムウィンドウの中のアイテム欄を開いた。

「売れそうなのは……これとこれか」

情報屋から買ったアイテムの相場を確かめながら呟く。

武器の中にも彼が使っているティアマトのようなユニークなものから、この世界のどこかにあると言われている聖剣エクスカリバーのようなメジャーなものまで様々だ。あいているテーブルに座って店のウィンドウを開くと、この店で一番安い一番安い茶を選ぶ、この世界のはるか東の国の名産品だそうだ。それをすすりながらワールドニュースを眺めることにする。最近話題の新モンスターや神槍ゲイボルグ獲得クエスト解禁のニュース、新フィールドである航空諸島の探索クエストなど……。今日もこの世界は概ね平和だった。周囲の話に耳を傾けてみる、中級のプレイヤー達が話しているのもっぱら伝説武器のことだった、伝説武器は持つだけで有名になれるためそれだけ関心が高い。

「おい、あいつだ……」

「ちつ、何でこんなところにいるんだよ……」

近くのプレイヤー達が俺の存在に気付いたらしく小声で話し始めた。そろそろ頃合いなので彼が酒場から出て行く、酒場でまとめた素材を道具屋に売り払ってから、次に向かったのはメインストーリーから少し離れた路地に入って裏通りだった。ここはメインストーリーに存在するNPCが営業している武器屋ではなく、プレイヤーメイド、つまり鍛冶スキルを上げたプレイヤー達が営業している店が軒を連ねている。彼はそんな中で一番大きな店の中に入っていく。

最近は知り合いの営業している武器屋に行っていないと思いつつ武器の整備が終わるまで待っていた。煙草をくわえて火をつけると夕空に紫煙が舞った。数分後、耐久度が元に戻った武器を装備し直す。

「・・・何か、狩りに行くか」

そう呟くと彼は大通りを抜けた。

第8話 日常（後書き）

お気に入り登録してくださった方、評価してくださった方、これからよろしくお願いいたします。では、いつも通り感想をお待ちしています。

第9話 迷いの森で（前書き）

メインヒロイン登場！

第9話 迷いの森で

彼がやってきたのは何処の街にもあるクエスト受付所だった。だが、彼が向かったのは受付に立っているNPCのところではなかった。目的の場所はクエスト受付所の近くにある転移用クリスタル、青く光る球体の周りを土星のリングのように金色の輪が回っていた。そして青く光るクリスタルの前に手をかざしてニルヴァーナがつぶやいた。

「迷いの森」

ニルヴァーナがそういうと一瞬目の前が暗くなり、次に明るくなったときはもうフィールドに転送されていた、このシステムが導入されてから結構立つが彼は未だにこの感覚に慣れることがない。今回来たフィールドは『迷いの森』時間帯は夜、星空の下に黒い針葉樹林の森が広がっている。とりあえず暗いので、アイテム欄からランタンを取り出す。暫く歩いているといきなり、モンスターが襲ってきた、夜行性のナイトゴブリンだ、数は4体、手には棍棒を持っている。どこのフィールドにでもいる小型のモンスターだ。

「即席錬成！」

手を合わせると青い雷光が奔る、そして錬成したのは黒い剣、それを使ってナイトゴブリンを倒す。使い終わった剣は捨ててポリゴンのかけらとなった。時間にしてわずか数秒のことだ、ゴブリン達を殲滅すると、再びランタンをかざして歩いていく。暫く歩くと森がとぎれて、白い花の広がる花畑に出た。空には二つの蒼い月が浮かんでいる。ここまで明るいランタンはいらないのでアイテム欄

に戻す。花畑の中を歩いていくと・・・白いドラゴンが現れた、大きな翼に攻撃的な爪が特徴なここのボスモンスターだ。最奥部にある巣から食事に出てきたところに遭遇してしまったらしい。

「出たな」

ティアマトーを抜き放つ。目の前にいる竜に向かって一言放つ。

「行くぞ」

その言葉と同時にドラゴンに向けてジャンプ、大上段からの一撃がドラゴンの体に直撃する、滞空している間に2回、3回と身の丈以上の大剣を振り回す。彼が地上に降りたところでドラゴンがブレスを3回放った。

「分離、飛刃結界！」

ティアマトーの柄が5つに分離、ニルヴァーナを守るようにしてドーム状に舞う、その直後、竜の放ったブレスが直撃、盛大に爆発のエフェクトが散ったが彼自身はダメージを受けていなかった。

このBWOでは様々なシステムスキルが存在する。片手剣だけでも100以上のスキルが存在するらしい。だがこれとは別にプレイヤー自身が編み出す『プレイヤーズスキル』というものが存在する。ニルヴァーナが使っている 分離 飛刃結界 もこのプレイヤーズスキルで、斬撃で相手の攻撃を防ぐというものだ。

「そうらっ！」

防御から攻撃へ、ブレスを吐いた後の硬直時間を見逃すニルヴァーナではない。今までドーム状だったティアマトーの刀身がドラゴ

ンの体に突き刺さった。今のもプレイヤーズスキル、大剣のスキル
ヴォルケンインパクト と鎖のモーションを合体させて編み出し
たスキル、ヴォルケンデストラクション だ。苦しむかのような
ドラゴンの咆哮、鎖を引いてドラゴンに刺さっている刀身を抜く、
再び柄を連結させて大剣状態へ、再びドラゴンがブレスを吐くモー
ションに入るが、それより早くニルヴァーナが前に跳んだ、一気に
距離を詰めてドラゴンの内懐へ、大剣のスキル ブラッドインパク
ト を3回繰り出す、HP回復のために逃げようと飛び立とうとす
るドラゴンを地上に引きずり下ろしてさらに攻撃、ダメージ音と赤
いエフェクトがはじける。ドラゴンのHPバーはもうレッドに突入
していた。そして・・・ドラゴンが花畑に倒れる。花びらが舞う中
でドラゴンの巨体が青白いポリゴンの欠片となって消えた。

「強さはそこそこ……か」

そう言ってドラゴンが落としたドロップアイテムを拾う。

「おお、レア金属ゲット」

ステータスウィンドウのアイテム欄を見てそう呟いた。ティアマ
トの強化に使えるだろう。

「行くか」

再び花畑を歩きだすニルヴァーナ、周囲に人は誰もいない、経験
値稼ぎならほかにも有名なフィールドがあるのでたいていのプレイ
ヤーはそこで経験値を稼ぐ、周囲に響くは風と葉鳴り音のみ。今回
このフィールドに来たのは情報屋から買った情報にあった希少金属
素材と経験値稼ぎを兼ねていた、本来ならあのドラゴンも4人か6
人のパーティーを組んで作戦を練りながら戦うものなのだが、彼に

はそれがない、ティアマトーを使って突撃、魔術も回復も自分でできるようになった。パーティーを組んでプレイするのが羨ましくないと言えは嘘になるが彼自身はこの一人で戦うことを気に入っていた。仲間意識の強いプレイヤーたちの間では『狂戦士』だの『はぐれ狼』だのと呼ばれているが特に気にはしない。

前に一度ギルドに所属していたことがあったが、その時のメンバーは、酷いいやがらせを受けてこの世界から去ってしまった。

それ以降、何度か臨時パーティーに加わったりはしているが、これといって特定の誰かと組むことはしなかった。それはただ、誰かと組むのが怖かっただけかもしれないと彼自身は思っているが、今更どうしようもない。全ては過去のこと、残っているのは結果だけだ。

「だいぶ奥まで来たな……」

いつの間にかかなり奥に入り込んでいた。月が出ていても足下が見えないので再びランタンを取り出す、黒い針葉樹林の間を彼は静かに歩いていく。不気味な森に浮かぶ人魂・・・これだけで相当怪談チックな話だ。

（彷徨うのはかつてこの地で殺された人の亡霊……あたりがメジャ―だろうな）

そんなことを考えながら黒い森を抜けると再び花畑があった、今度はさっきの花畑よりも広大で中央には湖があった。遠くのほうで戦闘が繰り広げられている、花畑の中を進むニルヴァーナ。戦っているのはアップデート時に追加された種族の一つ、機械人形だ。この機械人形というものは簡単に説明してしまえばアンドロイドのようなもので、必ず身体のだどこかに機械的な部分がある。基本的にはプレイヤーの身の回りの世話や、戦闘に連れて行けるNPCに分

類されている。だが他のNPCとは違い、主人と会話を成り立たせたり、冗談を言ったりとプレイヤーと何ら変わらない行動をする。

（ハグレ機械人形とは随分珍しいな）

時々、心ないプレイヤーが維持できなくなった、飽きたという理由で機械人形を捨てることがある。こういった機械人形はそのうち『野良』や『ハグレ』として分類され、モンスター同様に討伐されてしまう。野生で鍛えられたハグレ機械人形はそこらのモンスターより危険なので、一つのギルド総出で討伐することもあるという。彼女の相手は……このフィールドではめったに出現しない単眼巨人サイクロプス、かなりのハイレベルモンスターだ、手には盾と剣、大ぶりの攻撃だが当たればかなりHPを持っていかれてしまうだろう。対するハグレの方は手に黒い大太刀を持っていた。服装は和風メイド服、履いているのは黒光りするロングブーツで後頭部にある四本角型の感覚器が特徴的だ。サイクロプスが剣を振り下ろす、ハグレがそれを避けて手の剣を振るった、だがその攻撃はサイクロプスの盾によって防がれ、直後に剣が叩き込まれた。花畑の上を滑るハグレ、花びらが夜空に舞った。彼女のHPは残りわずか、後一撃でも食らえば彼女は这个世界から消失するだろう。

……彼ははこのまま彼女を見殺しにすることもできた。ハグレの一体くらい、どうということはないいつもの彼ならそうしていた。だが……彼はそれをよしとはしなかった。

「ヒール！」

魔法陣が展開して、ハグレのHPバーが回復する。サイクロプスに向けて大きくジャンプ、ティアマトーを空中で抜く、コートがはためく。

「ブラッディダンシング！」

大剣スキルの中で比較的隙の少ないものを放つ。腕に命中、サイクロプスがよろめいた。

「今だ、やれ！」

「Will！」

ハグレが両手に持っている長剣から双剣のソードスキル《月閃》2連撃、ド派手なエフェクトが散って、サイクロプスが大きくノックバックした、今度はニルヴァーナがティアマトーの通常攻撃5連撃、片手剣でも振っているかのようにティアマトーを振り回す、そこへ少女が追いついた。10連撃双剣スキル、《レイジングハーツ》が全て直撃、それが止めとなったらしくサイクロプスはポリゴン化して消滅化した。ハグレがニルヴァーナの方に向き直る。

「ありがとうございました」

「……ああ、すまん。横からいきなり」

「いえ……あのままだと私もやられていましたから……助かりました」

「お前は……ハグレか」

ニルヴァーナが目の前にいる機械人形にそう尋ねた。

「そうですね、一般的な分類から言えば私はハグレマキナ機械人形に分類されますね」

そういつてハグレが風に揺れた髪をかき上げた。

「唐突ですが……私のマスターになつてくれませんか？そう遠くない内に私は討伐されてしまふかもしれません、ここで遭つたのも何かの縁でしょう、もちろんそちらが良ければ、の話ですが……」

ハグレがそんな提案をしてきた。確かに彼女の言う通り、このままならそう遠くない内に討伐されてしまふかもしれない。そして彼は捨て猫を見捨てるほど冷血な人間ではなかった。

「認証方式は？」

「こうです」

その直後、ハグレがニルヴァーナの指を咥えた。数秒ほどその状態でいるとハグレの方が離れた。

「認証完了しました。これからはあなたが私のマスターですので……名前をつけてください」

ハグレが機械人形らしく折り目正しい態度で彼に向き直った。

「名前ねえ……そうだな……蒼華、なんてのは？」

「Wii、なかなかいいセンスですね。ではその名前でお呼び下さい。よろしくお願いしますね、マスター」

そう言うハグレ……ではなく蒼華はにこりと微笑んだ。一陣の風が花びらを巻き上げていく。こうしてこの月夜に一人のプレイ

ヤーと一人の機械人形マキナが出会った。

第9話 迷いの森で（後書き）

この中で蒼華が言っている「Wil」とは軍隊で使われる「了解」の一種である「Will comply」の省略形「Wilco」の頭の3文字です。では、感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3996y/>

黒衣の剣士と和服メイドのオンライン戦記

2011年11月19日16時26分発行